

1 前提

(1) 行政的な仕組み

- ・教育委員会が存在せず、国からダイレクトに方針が伝わる。
- ・教育委員会がないかわりに、校区のコミュニティ運営委員会があり、コミュニティが学校の運営方針を決める。(校長と、副校長もメンバー)
- ・コーディネーター(管理)とプレーヤー(教師)が明確に分かれる。
- ・学校独自の裁量が大きい→授業においても教師の裁量権が大きい。

(2) NZの教育への考え方

☆生涯教育が念頭にあること

- 知識は覚えられずとも、今後人生のどこかで学ぶことができる。
- 小・中学校では「学び方」や「学ぶ意欲」を育てる教育を重視している

☆別々の年齢、学年

- ・NZは誕生日を迎えると入学できる(一律4月入学ではない)
- 「そろえる」という概念が薄い
- ・1学年に年齢が別の児童がいる(1~2歳差がある場合もある。)(飛び級もある)

- ・学校が上がるにしたがって日本の学校に似ていく。
- ・学習内容自体は日本の方が難しい内容を扱っている。(算数はNZ5~6年に相当する内容を、日本では4年生で学習する。(2桁であるの割り算の筆算))(高校に相当する授業で理科の $V = R \times I$ を学習していた。)

(3) 教師の指導への考え方

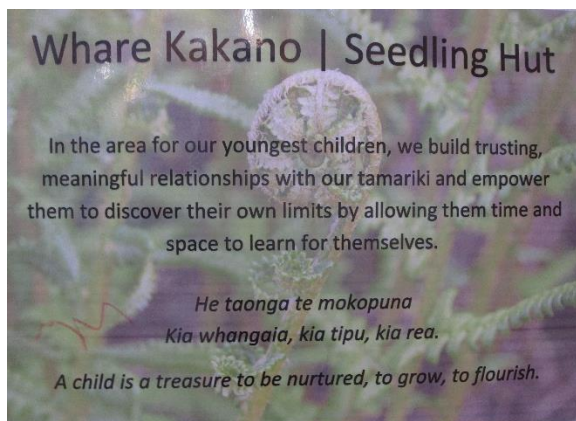
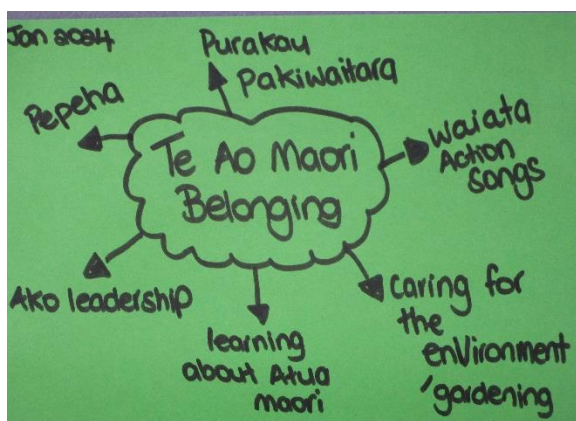
- ・教科書は存在せず、学習指導要領の項目をクリアするように教師が考えて授業をつくる。
- ・一斉授業は少なく、グループ別、個別など進度に応じた学習形態で学ばせていく
- ・日本でいう学習指導要領をしっかりと確認している。

2 今回の見学先の学校の場合

*学校独自のカリキュラムが組まれているため、学校ごとに特色が強くなる。そのためカリキュラムを「NZでは・・・」という主語で一般化できない。

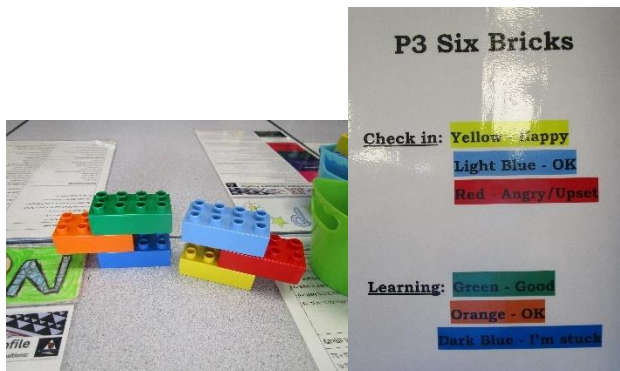
(1) 保育園・幼稚園「BestStart Lynmore」

- ・全国に展開している保育園・幼稚園
- ・子ども達の「種」を育てるべく、「禁止」(ダメ)や「怒る」ことをしない。
- ・両親の意向を尊重して、児童ごとの対応をしている。(例えば、お昼寝をさせる、させない など)
- ・ゴールを保護者が考え、設定し、職員と共有して子どもたちを育てている。



(2) 中学校「MOKOIA INTERMEDIATE」

- ・マインド（モチベーション）を大切にした授業
- 子どもたちに向けた掲示物
- 気持ちの意思表示をブロックで行う



- ・この学校は、家庭の経済格差が大きい地域で、不登校の子も多い。
- ・NZ は学校（学区）にグレードがあり、予算配分において、貧困の割合が高い地域に手厚く（給食も出る）、裕福な層が多い地区には支援を薄くする。
- ・メインティーチャーが授業を行い、サブティーチャーが支援を要する子を取り出して教えていた。
- ・メインティーチャーも、途中でわかっていなそうな子を取り出して教えていた。
- ・生徒は課題について、相談しながら学習を進めていた。（講義式では行っていなかった。）
- ・中には一人で黙々と考えている生徒もいた。
- ・相談がある生徒はメインティーチャーのところにいて聞いていた。

(3) 高校「RotoruaLakesHighSchool」

- ・学校のいたるところに、体を鍛える場所がある。
- ・日本の講義型の授業に近い。

☆NZ は大学に入学するために、資格を取る必要があるの高校の時に、行きたい大学が入学条件にして

いる単位を取らなければならない。（単位さえとればだれでも入学できる（定員がない））

☆そのため高校の時から自分の進路について考えて、授業を取らなければならない。

- ・地震が起きた時の行動は日本と同じ



3 研修先の学校の場合「Lynmore Primary School」

＊校長の意向が大きく反映されており、Hinei 校長が就任してから、7 割の職員が入れ替わっている。（校長の意向に賛同できる職員が残り、校長が進めたい教育に適した人材を呼び込んできた結果）

・この学校の特色は、「マオリ文化」と「自然教育」。

今後、デジタル教育を取り入れていきたいらしい。

(1) マオリ文化の学習

・Hinei 校長就任前は英語のみだったが、就任後はマオリ語、マオリ文化を多分に取り込んだカリキュラムとなっている。



＊マオリ語はローマ字と同じ。（日本語に近い）

＊ただし、a・e・i・o・u の順

(2) 自然学習

①この学習をするために講師を募集し、採用されたのが日本出身の「長谷 洋介」さん

・学校横のブッシュを活用し、NZ 特有の植物や動物を学んだり、どのように自然を作っていくのか、どのように守っていくのかを学習したりしている。



②マオリと地元行政の外来種駆除の活動に参加して、固有種と外来種の判別、取り方などを体験しながら学んでいる。(校外学習)

☆社会参画をしながら、どのように行動したら社会に貢献できるかを学んでいる。



*今回は、湖のナマズの駆除

*数を数えたり、種類を確認したりした。

・子どもたちは積極的に活動に参加しており、縦割

り班の活動のためリーダーの子が全体をまとめている。

☆NZ では環境教育(自然保護)に力をいれはじめています。

(3) Yaer O のクラス

- ・幼保から小学校への準備のクラス
- ・自分の学習の番が来るまで自由に遊んでいる。
- ・自ら選べるように、たくさんのものが用意されている。
- ・先生はよいものに○(☑)をつける。



(4) Yaer2 のクラス

- ・見学した時にやっていたことはライティングとサイエンスの授業
- ・何人かは呼ばれて、真ん中の部屋でサイエンス(磁石の性質)の授業を受け、終わったら自由に遊んでいた。

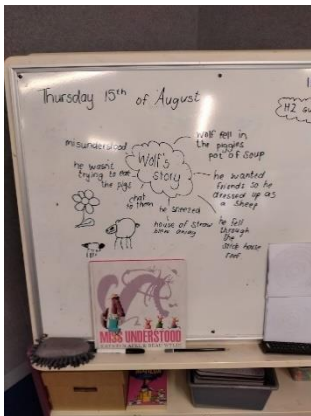
①サイエンスの様子



- ・磁石がくっつくものと、そうでないものを教室の中のもので試し、その後見本キットの物質で確認。
- ・予想を立ててから、実際にやってみる。
- ・日本でも同じように磁石の性質を確認している。

②ライティング

- ・三匹の子豚を読み、その後どんな話だったかを簡単にまとめる授業（だったと思われる）
- ・ホワイトボードに登場人物などを確認したのち、個々に取り組み始めた。
- ・おしゃべりしながら、絵をかいて、話を思い出しながら、文章をつくっていく子
- ・ホワイトボードを何度も見ながら、自分なりに進めていく子
- ・先生と共に進めていく子 など様々
- ・終わった子は自由に遊んでいた。



(5) その他

- ・学年という概念が薄い。
- ・ハリーポッターのように、組み分けがされており、この学校は4つの部屋に分けられる。
- ・縦割り班で生活することになる。

☆スタートが一緒ではないため、他人と自分は違うものということが前提ある。そのため取り出しでやっても、先生に呼ばれても、不自然ではない。

☆誰かと比べることが意味をなさない世界

☆「人よりもできる」ではなく「自分が満足するかどうかが大切なのだと思う。



4 個人的な感想

(1) キーワード

- ・学ぶ姿勢の育成（生涯学習）
- ・社会参画と行動力の育成

(2) 日本と比較

- ・学習内容や授業の内容は同じように感じるものがあった（日本の方が高度なくらい）
- ・根底にあるのが、生涯学習なのだと思う。

(3) 実例

①ホームステイ先の父の話

- ・子ども達は14歳になったら働かせたい
- ・「子どもはもっとお金のことを知るべきだ」

②家族の様子

- ・高校生の子ども達は家族の分の夕食をつくる
- ・中学生の子ども片づけをする（この子は週4ダンス、週1でホッケーをしている）

③17歳で車を修理できる

- ・高校で学んだことを生かして、家で車を修理できるくらいの技能を身に着けている。

- ・子どもを大切にすることというのは、日本も同じ。

- ・「うちは過保護なの」とのこと

- ・子どもにいろんな経験を積ませたいという気持ちを感じ取れた。（学習塾には行かせていない）

5 学校の日課

(1) 日課（75分授業×4）

①スタッフミーティング（週1）

①ホームルーム

②授業

③モーニングブレイク（軽食）20～30分

④授業

⑤ランチブレイク（昼食）20～30分

⑥授業

⑦スタッフミーティング（週1）

(2) 職員も必ずブレイクの時間に休む

- ・代わりに見回り当番がある
- ・ミーティングもレクをしてからはじまる

6 全体的な考察

教育システムや社会のあり方が日本とは違うため、ニュージーランド教育のよさをすべて取り入れることはできない。

ニュージーランドの学校や家庭を視察して感じたことは、市民教育としての社会参画や生涯教育が根底にあることだ。

(1) ホームステイ先での学び

ホームステイ先の家庭では、親と子どもで家事を分担し、とてもスムーズに生活をしているようであった。子ども達は習い事を毎日のようにしているが、土日は行っておらず、家族ですごすことを大切にしていた。私は15歳の子どもがとても立派な夕食を出してくれたことにとても驚いた。

14歳になったら働くことができるようで、父親は14歳以上の子ども達に働きに出てほしいと考えていた。それは経済的に苦しいからではなく、働くことでお金のことや社会のことを学んでほしいという思いからであった。だからといって無理に働かせようとしているわけではなく、ラグビーで肩に大きなけがをした子は無理に働かなくていいとも言っているし、17歳の息子には古い自動車を用意して、学校で学んだ自動車整備の技術を家でも実践できるようにしていた。

社会とのつながりの中で子どもを育てたいという考えが伝わってきた。

(2) 学校を視察しての学び

①一貫して育てようとしていること

幼保の段階では興味や好奇心などを伸ばしていた。小学校ではグループ別や個別に子どもたちを見て、学び方を育てるなど、個を見取ることをしているように感じた。

中学校での感情をブロックの色で表す取り組みや、小学校の自然教育の取り組みなどから子どものモチベーションを考慮して指導していることがわかった。

研修を行ったリンモア・プライマリー・スクール(以降リンモア)でも、話を聞かなかったり、自然教育をする際に気持ちが落ち着かなかったりする子ども達がいたようだ。そこでティーチャーズミーティングをして、学校に来て日が浅い先生と子ども達との関係性がまだできていないと考え、授業評価のよ

うなものをシールを貼って行っていた。(普通はこういったことはしないらしい。)ここにも子どものモチベーションを考えた取り組みがあった。

学びに向かう興味や好奇心、動機などを考えて授業を考えている様子は他にもあり、算数の線対称を考える授業ではオリンピックともかかわらせて国旗を教材化して行っていた。

②学校での市民教育

リンモア独自のカリキュラムである自然教育は、校外学習や学校林を活用して行われていた。

校外学習は地元行政とマオリの自然保護事業に参加した。外来種のナマズを駆除し、生態系の調査をすることを通して、自分たちが地域の活動に参加していると思うことができる。また学校林の外来種を除草するなど、どのように社会に参画できるのかを体験から学ばせようとしていると感じた。

(3) まとめ

これからのことから、ニュージーランドでは興味や好奇心を育て、そのモチベーションを実現するための学び方や生かし方を育てているように感じた。この考えは、学校教育にとどまらず、生涯において学んでいける人間を育成できると思う。

また、社会参画ができる機会を取り入れることでキャリア教育にもなっている。

日本と教育のシステムや社会のあり方は違うが、日本でもキャリア教育を行う上で、総合的な学習の時間などを活用して社会とのつながりがある活動をすることはできると思う。私自身、生涯教育やキャリア教育の観点で日々の授業はあまり行っていなかったように感じる。

自由進度学習などを行い、学び方を身につけることで生涯にわたって学習していける子どもや、自分と社会のつながりを感じ自分に価値を見出せる子どもを育てていきたいと思った。

また子ども達には、人とくらべて生きるのではなく、自分が満足するかどうかで学びを深めていってほしいと思った。